

「足尾に緑を育てる会」が呼びかけ、足尾に植林がはじまって十一年たつ。毎年あまりにもたくさんの方が訪れ、植林場所となっている「大畑沢緑の砂防ゾーン」は人でごったがえするほどである。山も人で真っ黒になり、植樹活動は年々歳々さかんになっている。

そもそもの会の前身は、一九九五（平成七）年に結成された「渡良瀬川協会」である。その後、幾つかの団体が集まって「足尾に緑を育てる会」が結成されたのだが、私は「渡良瀬川協会」に参加していた。足尾鉍毒事件や田中正造に関する資料が、時がたつにしたがって散逸する。それらの資料を集めて後世に残そうという趣旨で結成されたのが「渡良瀬川協会」であった。

### 渡良瀬川 5 団体が結集

栃木県出身の宇井純氏が主宰して、公害研究では一時代を画した自主講座「公害原論」が解散になるにあたり、そこにあった大量の文献の主だったものを継承するかたちで「渡良瀬川協会」の活動ははじまった。現在もその活動はつづいていて、その拠点となる資料室は「足尾に緑を育てる会」の事務局と同居するかたちで、足尾市街地の通洞駅の近くに昨年オープンした。

もちろんそこに参加する人たちの思いはさまざまではあるにせよ、私は田中正造の思想を継承し、田中正造のやり残した足尾での治山治水の事業を実感したいと思ったのである。

「足尾に緑を育てる会」会長の神山英昭さんは、当時は足尾町役場の職員で、私たちが宇都宮市内で勉強会のようなことをはじめると、はるばる足尾から車を運転して駆けつけてくれたものである。

考えてみれば、もう三十年もの付き合いとなる。神山さんは足尾のために自由に活動できる立場を得たいということで、足尾町役場を早期退職した。

活動も試行錯誤の連続であった。「渡良瀬川協会」が結成された年、有志が、現在植林をしている場所に桜を十本植えた。花見をしにいいということが理由であった。しかし、そり年の秋までに十本はすべて枯れてしまった。本気で植林をしなければ駄目だということになり、渡良瀬川上流下流の団体が五つ集まって「足尾に緑を育てる会」が結成されたのは、九六（平成八）年五月のことである。

この時の標語が「足尾に百万本の木を植えよう」ということであった。何気なくでた百万本という言葉だが、後にそれがどんな意味を持つのかは痛いほどわかるようになる。

### 軽く 200 年かかる大事業

私は最初の植林から参加している。苗もスコップも持ってきてほしい、という呼びかけだったが、交通の不便な足尾であり広報活動もそれほどできていなかったから、元々の仲間の十数人で植林をすればよいというイメージであった。ところが蓋（ふた）を開けると百六十人がきてくれた。会では苗が用意できなかったから、それぞれが持参した百本の苗木を植えた。それでも多くの方がきてくれて、私は涙ぐむほど感動したものだ。

それ以降、年々、植樹活動はさかんになり、植えた木の80%から90%は育ち、はげ山は日に見えて緑になっている。今年の四月二十三日、春の植樹デーには千三百人もの方がきてくれ、約四千五百本を植えた。この十一年で約七千人が参加し、約三万七千本の苗木を植えたことになる。

だが百万本まではまだまだ遙（はる）かな道のりである。二百年は軽くかかるという、気の遠くなるような大事業なのだ。